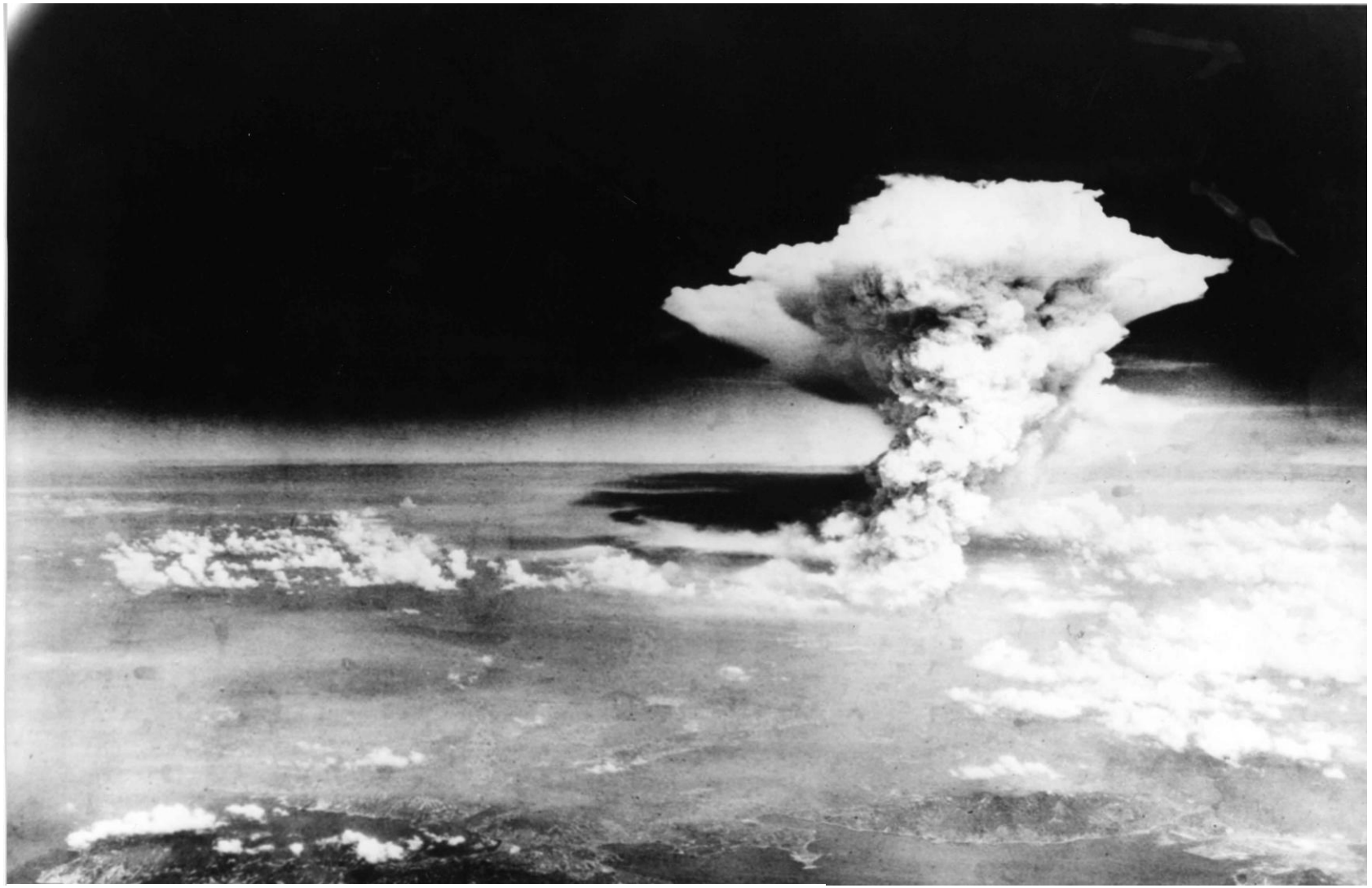
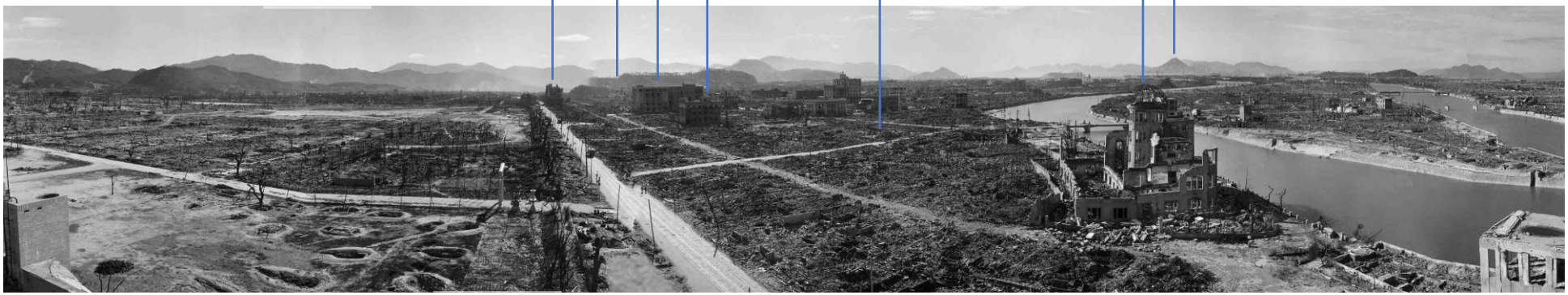
第４章　原子爆弾投下



4-01　広島壊滅　1945 年 8 月 6 日　松山市沖合の野忽那島上空約 9,000m から米軍偵察機が撮影

・原子爆弾投下

1945（昭和 20）年 8 月 6 日、テニアン島を飛び立った B29 爆撃機エノラ・ゲイは、午前 8 時 15 分、人類史上最初の原子爆弾を投下しました。リトルボーイと呼ばれたウラン型の原子爆弾は、広島市細工町（現大手町一丁目）の島病院の上空約 600m で炸裂しました。広島の街は一瞬にして焦土と化し、多くの人々の生命が奪われ、全ての都市機能は壊滅的な被害を受けました。同年末までの死者は約 14 万人（誤差±1 万人）と推計されています。



4-02　広島の廃墟　1945 年 10 月 5 日

4-03　被爆前の広島市街　1945年4月13日
空襲に備えデルタ中央部を東西に貫く防火地帯建設のため、建物疎開作業が始まっていた

4-04　被爆後の広島市街　1945年8月11日
爆心地から半径2㎞内外、白く映っている区域の建物は全壊又は全焼した

4-05　被爆前の広島市街（中心部）　1945 年 4 月 13 日

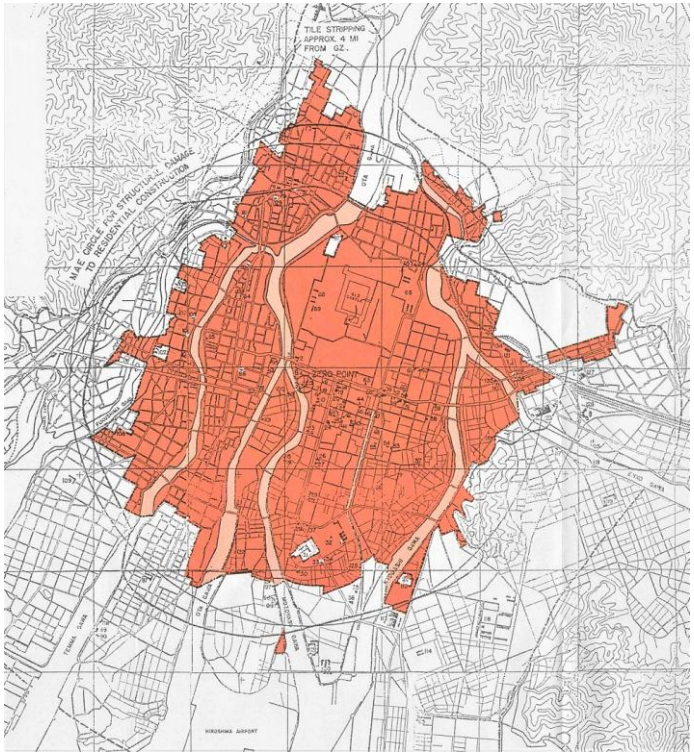
4-06　被爆後の広島市街（中心部）　1945 年 8 月 11 日
鉄筋コンクリート造の建物を除き、建物の姿は残っていない

・破壊

原爆の爆発の瞬間、爆発点は超高圧となり、まわりの空気が急激に膨張して衝撃波が発生しました。その圧力は爆心地から 500m の所では、1 ㎡あたり 11t、爆心地から 100m の地点での爆風は秒速約 280m に達したと考えられています。

爆心地から半径 2 kmまでの地域では、爆風により木造家屋はほとんどが倒壊し、鉄筋コンクリート造の建物も、崩壊を免れた場合でも、窓は全部吹き飛ばされ、内部はことごとく焼失するなどの大きな被害が生じました。

爆心地の地表温度は、セ氏 3,000～4,000℃に達しました。半径約 2 km内の約 4 万 5,000 の建物はほぼ全焼全壊し、市内の建物 7 万 6,327 の 91.9%が壊滅的な被害を受け、焼失面積は 13 ㎢に及びました。



4-07　原爆による火災被災状況図

4-08　壊滅した広島城　1945 年 11 月
原爆の衝撃波・爆風で爆心地から北東約 1 kmの広島城は壊滅した。国宝指定の天守閣は倒壊し、表御門なども倒壊して延焼した。城内の中国軍管区司令部や、周辺に配置されていた歩兵第一補充隊などの主要部隊も甚大な被害を受けた

4-09　被爆後の天守閣跡（南から撮影）天守台の上には、倒壊した材木が広がっている
1945 年秋

4-10　爆心地から 200m、元安川左岸の広島瓦斯（がす）本社ビル
1945 年 10 月

・人的被害

原爆の炸裂後発生した火球の表面温度は約 0.2 秒後にはセ氏 7,700℃となり、爆心地から半径 3.5 ㎞以内にいた人は熱戦の当たった部分に火傷を負いました。特に、約 1.2 ㎞以内で熱線の直射を受けた人は、体の内部組織にまで大きな損傷を受け、そのほとんどが即死又は数日のうちに亡くなりました。

4-11　爆心地から東南約 2.2 ㎞の御幸橋西詰めで倒れ込み、宇品署員から応急手当てを受ける避難者。左奥は宇品署千田派出所　1945 年 8 月 6 日午前 9 時半～11 時頃

原爆投下時、市内には学校・企業・地域などから動員された人も多数いました。中でも建物疎開作業に動員された中学校、高等女学校等の少年少女学徒、地域・職場の国民義勇隊は、遮るもののない屋外で倒れました。1959 年の広島市と広島県動員学徒犠牲者の会の調査によると、学徒の建物疎開作業従事者は 9,111 人で、3 分の 2 近い 5,618 人が死亡したことが分かっています。また、体調不良等で作業に参加しなかったため生き残った人もいましたが、生き残ったことに対する負い目から深い心の傷を負いました。

原爆の核分裂により放出された中性子やガンマ線などの大量の放射線は、人体の奥深くまで入り込み、細胞を破壊し、生き残った人々の身体に深刻な障害を及ぼしました。その影響は今なお続いています。

4-12　爆心地から約 2.6 ㎞の第一国民学校（現段原中学校）に収容され治療を受ける火傷患者　1945 年

・未曽有の混乱

広島市は戦時下、空襲被害を想定して市内の支援体制、地区ごとの避難場所などを定めていましたが、想像を絶する原爆の被害に対してはなすすべもありませんでした。そうした中、被害が軽微だった陸軍船舶司令部は直後から市内の消火活動や救援・救護に各部隊を出動させました。地区特設警備隊、警防団、警察署等も救援活動に乗り出し、岡山や鳥取県などからも医療従事者が入ってきました。

被災者への食糧支援は 8 月 6 日当日から周辺の町村で炊き出しの握り飯が提供され、重傷者を各役場や学校にも収容。佐伯郡内の収容被災者は終戦直後の 8 月 17 日には約 2 万人にも達しました。また、陸軍糧秣支敞は貯蔵の缶詰類、陸軍被服支廠は衣服等も放出。焼け落ちた県庁の全部門は同 20 日、市外府中町の東洋工業本社に移り、広島市と復興への取り組みを始めました。

4-13　爆心地から約 460m で焼け残り、救護所となった鉄筋 3 階建ての袋町国民学校西校舎 1 階階段の壁には、捜索者らの伝言が書かれた　1945 年 10 月 6 日

市内から徒歩で脱出、あるいは鉄道、トラック、船等で市外に運ばれた避難者・負傷者の数は 20 万人を超えました。北部方面では庄原市・東城町（現庄原市）、西部方面では大竹市・岩国市等の遠隔地にも多数が収容され、救護所や学校などのほか民家にも割り当てて避難者を収容しました。

4-15　救援のため市内へ入った人々　左のビルは芸備銀行（現広島銀行）本店、右は住友銀行広島支店　1945 年 8 月 7～9 日

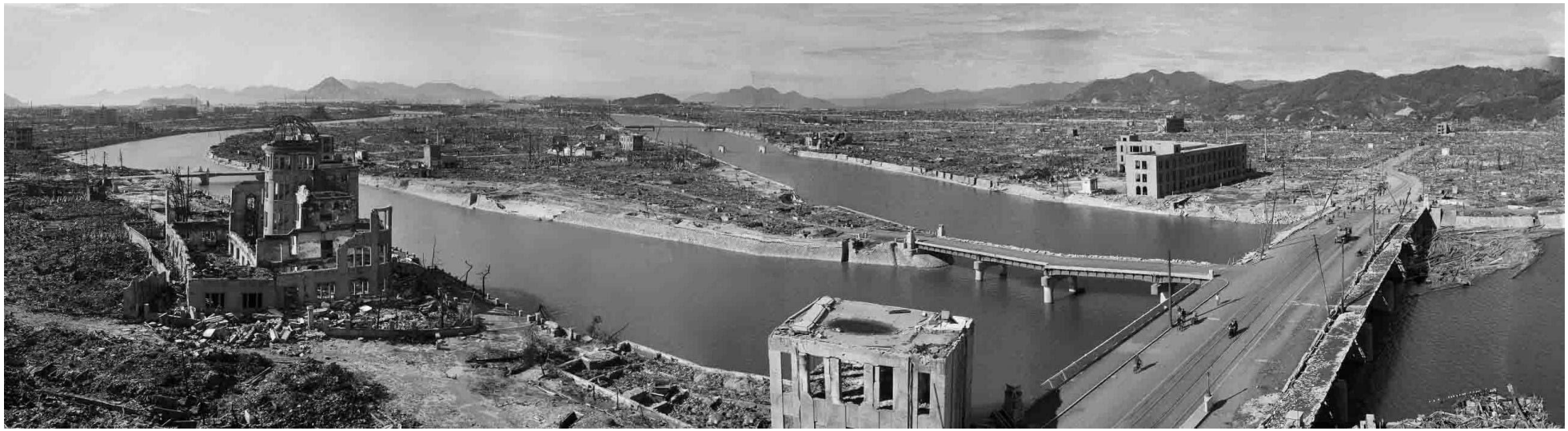
原爆により医師・看護師ら医療従事者も多数が犠牲となった中で、負傷した人々は焼け残った広島赤十字病院や広島逓信病院に殺到しました。ただ、多くの人々は国民学校などに開設された臨時救護所で手当てを受けました。8 月 6 日から臨時救護所が閉鎖された 10 月 5 日までの間に救護を受けた被爆者の人数は、県が把握しているものだけで延べ 31 万 5,910 人に上りました。さらに救援や家族の捜索のため入市し、残留放射線の影響で体調を崩して亡くなる人も続きました。

4-14　臨時県庁が置かれた東警察署へは救援の食糧が運び込まれた　1945 年 8 月 9 日

市街には原爆による焼死体が累々とあり、その処理も重要な課題でした。原爆投下翌日の 8 月 7 日には、「屍体収容ハ出来ルダケ迅速ニ行フコト」が決定され、現地で火葬か埋葬等に付すこと、刑務所の囚人を出動応援させること、郡部から僧侶を集め読経させることなどが決定・通知されました。自宅等で亡くなり、家族の手で火葬に付される人々も数多くいました。

4-16　荼毘に付される遺体。福屋百貨店に収容され亡くなった人たちは南側の空き地で火葬された　1945 年 8 月 10 日

4-17　被爆前の中島地区一帯　1938 年頃
商工会議所屋上から見る広島の繁華街・中島本町（現在の平和記念公園）。左端は産業奨励館（原爆ドーム）、右側T字型の相生橋とつながる東西の木橋は1938 年に取り除かれた



4-18　被爆後の中島地区一帯　原爆はT 字型の相生橋を照準に落とされた。右奥は焼け残った鉄筋コンクリート造の本川国民学校　1945 年 10 月 5 日